

朝、窓を開けると見慣れたいつもの景色が目の当たりに広がる。晴れた朝、曇り、雨の朝、一面真っ白な雪の朝。こんな光景を気にも止めず、ごく普通に過ごしている私がいま

す。  
この変らない毎日の景色も、その日の心の動揺で随分違った感じに映るというのも不思議なものです。

こうした景色を私が見て感じる朝も、他の人が見て感じる朝もやはり同じに感じられるでしょうか。

視覚に入った景色は脳の中を駆けめぐり過去の残像や記憶と新たな発見を瞬時に見分けその景色を自己評価した結果、感動や嘆きが心に生まれてくるのでしょうか。

まさに自分だけの感性の世界なのでしょう。

さて、そうした自分だけの感動も「心地よさ」と置き換えれば、多くの人々の共通観を見いだせるかも知れません。

道端に咲くすみれ草やたんぽぽの花、なんだか想像しただけでほんわかした気分になるのは私だけでしょうか。

川辺に密集して生殖している七草のセリ、流れる水面の一時も定まらないきらめき、こんな光景がまだ山里には見受けられます。

山間の古寺の参道にあるこけむす石段、その参道をもみじの枝葉が優しく包んでいます。

初冬にはこけむす石段も紅葉のジュータンで覆われ、行く秋をしみじみと感じさせてくれたりします。

こんな景色の「心地よさ」につい時間を奪われてしまいますが、きっと少しずつのちっちゃなときめきが、沢山集まって大きな感動へと発展するのでしょうか。

こんなちっちゃなときめきだけど、まず身近な人からそれを伝えていくことで、波紋のように広がっていき「心地よさ」を共有化できる様になれば、何気なく過ごしているいつもの景観も、心の動揺で素敵な景色に移り変わって見えることでしょうか。

私は、美しいやまぐちづくりの手法として「ちっちゃなときめきの心」を、伝えることから始めています。